

小学校・中学校のスムーズな接続をめざした学習過程の工夫

ーネット型の実践を通してー

体育・保健体育科研究会議

研究員 原 剛 (川崎市立南加瀬小学校) 佐藤 大樹 (川崎市立野川小学校)

千葉 哲也 (川崎市立南加瀬中学校) 津曲 三紀 (川崎市立井田中学校)

指導主事 森島 烈

I 主題設定の理由

小学校では今年度から新学習指導要領が全面実施となり、中学校でもいよいよこの4月から全面実施となる。今回の学習指導要領では、義務教育段階の12年間を4年ごとの3つのまとまりとしてとらえており、小学校5年生から中学校2年生までの4年間をひとまとまりとしている。

川崎では小・中合同体育・保健体育研究協議会が今年で38回を迎えるなど、小・中の連携の重要性をお互いに理解しながら交流を図ってきた。しかし、実際には小学校、中学校それぞれが、研究会を中心に各領域や種目ごとに研究を重ねてきており、校種をまたいでの研究というものは、あまりされていない。

そこで今回は、今まで、それぞれの校種ごとに行っていた研究をつなげていくことはできないかという考えのもと、それぞれの学習過程をどのように工夫していったらよいかという視点から研究主題を設定した。

II 研究の内容

1 研究のねらい

今回の学習指導要領では、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の育成をめざし、小学校から高等学校まで、指導内容の体系化が図られた。また、小学校と中学校と校種は違っても、小学校5年生から中学校2年生までの4年間を、「多くの領域の学習を経験する時期」と位置付けている。そこで、この4年間をつなげていくことこそ、これからの体育学習には必要なことであると考えた。

本研究会議では、ボール運動及び球技領域におけるネット型の授業を通して、小学校ではどのような指導をし、中学校につなげていけばよいのか、また、小学校での指導を踏まえて、中学校ではどのように発展させた指導をしていけばよいのか、授業実践を通して、それぞれの学習過程を考えていきたい。

III 研究の実際 (検証授業)

以下はそれぞれの授業実践をまとめたものである。

1 川崎市立A小学校 ソフトバレーボール 6年生の実践 (指導計画、5年生での取組はない。)

(1) 学習過程の工夫

- ①ボールをつないで得点を取り合うゲームの楽しさを十分に味わうために、ゲーム中心で進められるようにした。
- ②ゲームの時間を十分に確保するために、はじめに全員で行う練習はあくまでボール慣れ程度にした。ゲームを通して「勝ちたい」というこだわりから練習や作戦の必要感をもたせていった。

(2) 学習過程

	1	2～3	4～6
学 習 活 動	簡単なルールを知って、ゲームを楽しもう。 1. ルールを知る。 2. ゲーム① 3. ルールの確認。 4. ゲーム② 5. ふり返り。	基本的なボール操作や動き方を知り、ルールを工夫しながらゲームを楽しもう。 1. 直上パス。 2. ルールの確認。 3. ゲーム① 4. 変更したルールの確認。 5. ゲーム② 6. ふり返り。	チームや自分の課題にあった練習をしたり、よさを生かした作戦を立てたりして、ゲームを楽しもう。 1. 直上パス、円陣パス。 2. 簡単な作戦を立てる。 3. 作戦に合ったチーム練習。 4. ゲーム① (発展したルール) 5. ふり返り、作戦に合ったチーム練習。 6. ゲーム② (発展したルール) 7. ふり返り。

(3) 手だて

①ルール・場や用具

- 基本のルール**
- 1チーム4人。フリーポジション。
 - 相手コート内にボールを落とすと得点が入る。
 - 1セット15点先取した方が勝ち。
 - 味方で何回でもつないでよい。
 - 2人目の人はボールを持ってよい。(キャッチバレー)
 - 一人が2回続けてボールにさわってはいけない。
 - サービスは青い線より後ろから順番に打つ。

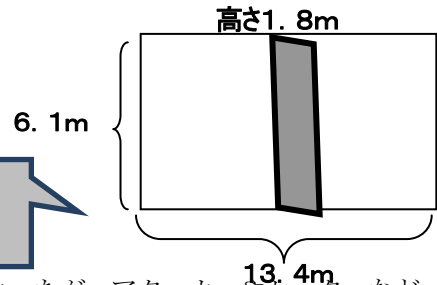
基本のルール → 発展したルール

- ラリーポイント制で1セット20点先取。
- 味方でつなぐのは5回まで。
- サービスは中央付近から打つこととする。
- サービスは2回まで打つてもよい。
- ゲーム中、タイムアウトをとることができる。

100g
ビニール製



バドミントン
ダブルスコート



(4) ふり返り

- ①技能(直上パス・アタックなど)は、全体では少しずつ身につけていったが、アタッカーやセッターなど、一部の児童の技能の伸びは著しかった。
- ②キャッチを使うと、バレーボールらしく(3段攻撃)ラリーが続いた。
- ③ゲーム中心で学習を進めると、作戦(最後は~さんにボールを集めよう。セッターの位置決めなど)・練習(壁パス・ポジションに入ってからラリー練習など)は必要感から生まれた。
- ④キャッチルールがあると作戦(速攻・~さんが右側から打つなど)が立てやすかった。
- ⑤ゲーム中心で学習を進めると、意欲は向上した。
(調査: 29人中 「楽しかった」 1時間目10人→6時間目25人)

2 川崎市立B小学校 ソフトバレーボール 6年生の実践(指導計画、5年生での取組はない。)

(1) 学習過程の工夫

- A小学校の実践を受けて、ボール操作の技能の高まりや関係プレーによる攻撃の仕方の習得をねらって次のことを工夫して計画した。
- ①ボール操作の技能の高まりや関係プレーによる攻撃の仕方の習得をねらってドリル練習やタスクゲームを取り入れた。
 - ②ルールを工夫(ワンバウンドあり)することにより、「ボール操作の技能」が安定的に発揮され、関係プレーによる攻防でゲームを楽しむことができるようにした。

(2) 学習過程

	1	2~4	5	6~8
学習活動	<p>はじめのルールを知り、ゲームを楽しもう</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. はじめのルールを知る。 2. ゲーム①。 3. ルールの確認。 4. ゲーム②。 5. ふり返り。 	<p>つなぐためのボール操作や関係プレーでの攻撃の仕方を知り、ゲームを楽しもう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ドリル練習とタスクゲーム。 2. ゲーム①。 3. ふり返り。 	<p>チームの課題に合った練習をしたい。特徴を生かした作戦を立てたいして、ゲームを楽しもう。</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 進んだルールを知る。 2. ゲーム①。 3. ルールの確認。 4. ゲーム②。 5. ふり返り。 	<ol style="list-style-type: none"> 1. チームにあった練習。(ドリル練習やタスクゲームから選択) 2. ゲーム①。 3. ふり返り。

(3) 手だて

①ルール・場や用具

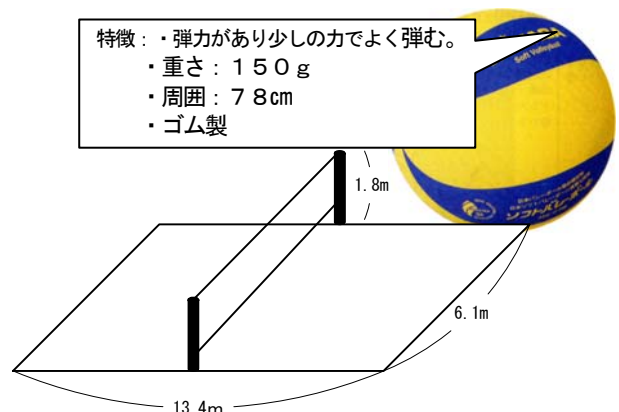
はじめのルール

- ・ 4対4で行う。
- ・ 4回までのタッチで相手にボールを返球する。
- ・ 相手からの返球に対して、ワンバウンドまで認める。
- ・ サーブは、中央の位置から下から打つ。
- ・ 両手のひらのアンダーハンドやキャッチしてのオーバーハンドは認めない。
- ・ 得点が入るとローテーションを行う。
- ・ 10分間の得点数(ラリーポイント)を競う。

進んだルール

- ・ 4対4で行う。
- ・ 4回までのタッチで相手にボールを返球する。
- ・ 相手からの返球に対して、ワンバウンドは認めない。
- ・ サーブは、中央の位置から下から打つ。
- ・ 両手のひらのアンダーハンドやキャッチしてのオーバーハンドは認めない。
- ・ 得点時にローテーションを行う。
- ・ 15分間の得点数を競う(ラリーポイント)

特徴: ・弾力があり少しの力でよく弾む。
・ 重さ: 150g
・ 周囲: 78cm
・ ゴム製



②ドリル練習、タスクゲーム

- ・単元を通して、アンダーハンドパス、オーバーハンドパスの技能を高めるドリル練習を行った。
- ・つなぐことや連係プレーによる攻撃の動きを高めるためのタスクゲームをチームで行った。単元の後半は、チームの特徴に応じてタスクゲームを選択して練習できるようにした。

(4) ふり返り

- ①「ワンバウンドあり」のはじめのルールは、安定したボール操作という面では効果があったが、ボールを落とさないでつなぐというバレーボールの特性から考えると課題が残った。
- ②ボール操作では、スモールステップでドリル練習をすることにより、アンダーハンドパスやオーバーハンドパスのぎこちなさが少しずつ解消され連続パスの回数が増えた。連係プレーを課題にしたタスクゲームでは、セッターに戻したり、トスされたボールをアタックしたりするプレーがみられるようになった。ドリル練習やタスクゲームは、技能向上を意図していたため意欲の低下が心配されたが、課題が明確であったため「できる喜び」を感じながら学習する児童が多かった。

3 川崎市立C中学校 バレーボール 2年生の実践（指導計画上、1年生での取組はない。）

(1) 学習過程の工夫

- ①ゲームを中心に授業を展開し、ゲームの中でのつまずきを見つけ改善し、ゲーム展開をよりよく行うための技能の向上につなげるようにした。
- ②チームの活動を中心にして、励ましやアドバイスし合える場面をつくるようにした。

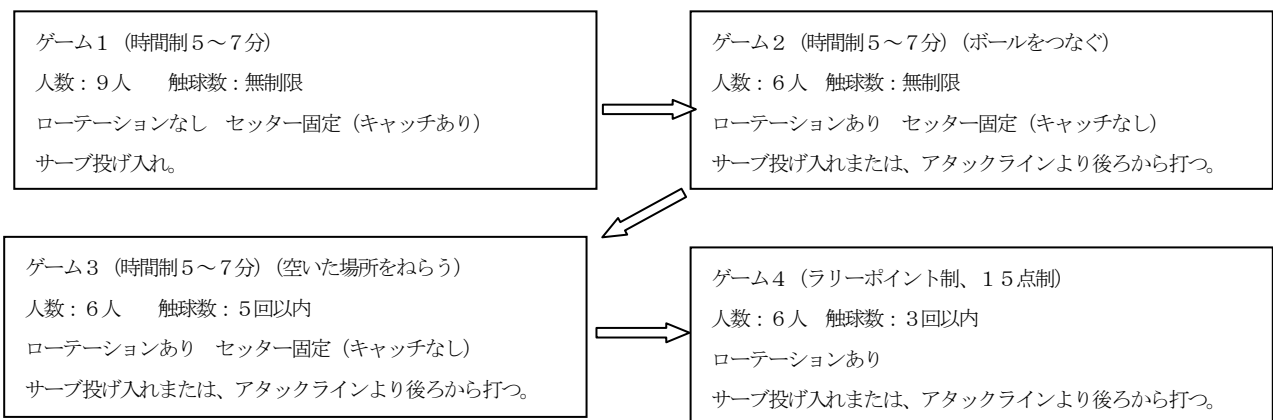
(2) 学習過程

	1	2	3	4・5	7・8・9	10・11	12・13・14	
学習内容・活動	ねらい1 基本的な技能を身につける。(習得)				ねらい2 身についた基本的な技能を生かして、空いた場所をめぐる攻防を展開できるようにする。(活用)			
	○学習の進め方 ○特性・成り立ちについて	○準備運動 ・直上パス ・対人パス ・移動パス等	○チーム編成 ・アンダーハンドサーブ ・ネット越しパス	○ゲーム1 ・打球に備えた姿勢	○ゲーム2 ・味方が操作しやすい場所にボールをつなぐ。	○ゲーム3 ・相手コートの空いた場所をねらう。	○ゲーム4 ・リーグ戦	
技能		②	①	⑦⑥	④	⑧	⑤③	
態度			⑥	⑤②	③	④	①	
知識	①③					②	④	
思・判		①			④②	③	⑤	

学習活動に即した評価規準

技能	関心・意欲・態度	知識・理解	思考・判断
①サーブではボールの中心付近でとらえることができる。 ②ボールをかえす方向に体を向けて打つことができる。 ③相手側のコートの空いた場所にボールを返すことができる。 ④味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができる。 ⑤テイクバックをとって肩より高い位置からボールを打ち込むことができる。 ⑥相手の打球に備えた準備姿勢をとることができる。 ⑦プレイを開始するときは、各ポジションごとの定位置に戻ることができる。 ⑧ボールを打ったり受けたりした後、ボールや相手に正対することができる。	①バレーボールに、積極的に参加しようとしている。(共通) ②フェアなプレイを守ろうとしている。(公正) ③分担した役割を果たそうとしている。(責任) ④話し合いに参加しようとしている。(参画) ⑤仲間の学習を援助しようとしている。(協力) ⑥健康・安全に留意している。(健康・安全)	①ネット型やバレーボールの特性や成り立ちについて、言ったり書き出したりしている。 ②バレーボールの技術の名称やその具体的なやり方や活用方法について、言ったり書き出したりしている。 ③バレーボールに関して高められる体力について、言ったり書き出したりしている。 ④簡易な試合のルールを言ったり書き出したりしている。	①ボール操作やボールを持たない動きなど、バレーボールのやり方の自分に合ったポイントを見つけている。 ②自己やチームの課題を見つけている。 ③自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。 ④分担した役割に応じた協力の仕方を見つけている。 ⑤学習した安全上の留意点を他の試合場面に当てはめている。

(3) 手だて



コートは9m×9mで、ネットの高さは、2m05cmで行った。

(4) ふり返り

- ①技能面では、個人差が出てしまい、ミスをおそれ委縮してしまう場面が見られるので、教師側からのプラスの声かけを多くするように心がけた。その結果、生徒間でも仲間をフォローできるような声かけが多くなってきた。また、一部の生徒の技能向上に向けた努力する姿勢が、多くの生徒に広がっていった。
- ②準備運動のパス練習を、1人で行うものから、2人組の対人パス、ボールを前後左右に振ってのパス、ねらった相手に返すパスなど、ゲームに近づけるものにしていった。その結果、ゲーム内でボールを1回で返球することが減り、チーム内でパスを回し、返球しようとする意識が持てるようになった。
- ③ゲームのコートが9m×9mでは、カバーするスペースが多くボールをうまく拾うことができず、パスがつかまらないことがあったので、コートサイズを小さくするなどの工夫が必要だった。

4 川崎市立D中学校 バレーボール 1年生の実践 (指導計画上、1、2年生で取り組む。)

(1) 学習過程の工夫

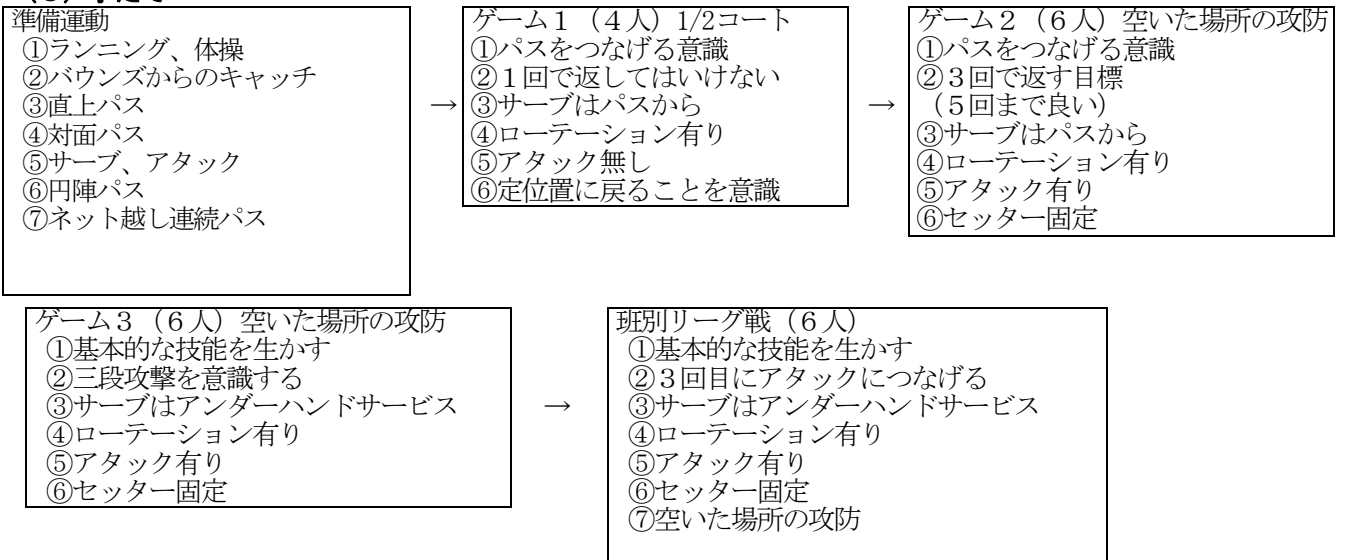
C中学校の実践を受けて、ルール工夫や、生徒が萎縮せずに伸び伸びとプレイできる雰囲気作りを心がけ、次のことに工夫して計画した。

- ①準備運動を大切にし、ルールの工夫をしながら、ゲームにつなげられるようにした。
- ②バレーボールを楽しむために、お互いに声をかけ合うコミュニケーションを大切にした。

(2) 学習過程

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	
学習内容・活動	ねらい1 基本的な技能(ボール操作、定位置にもどるなどの動き)を身につける。					ねらい2 身につけた基本的な技能を生かして空いた場所をめぐる攻防を展開できるようにする。						
	○学習の進め方	準備運動:ランニング2周 体操 ボール慣れ(バウンズからのキャッチ、直上パス) 基本練習(対面パス、サーブ、アタック)										
	○学習ノート記入の仕方	チーム練習(円陣パス、ネット越し連続パス)				ゲーム1		課題発見と課題練習				
	○特性や成り立ちについて	相手の打球に備えた準備姿勢をとる		ボールを返す方向に体を向けて打つ		相手側のコートの空いた場所にボールを返すことができる						
	○チーム編成	味方が操作しやすい位置にボールをつなぐ					サーブではボールの中心付近でとらえる					
	○準備運動の仕方	プレイを開始する時は、各ポジションの定位置にもどることができる										
	技能		⑤	②	④	⑥		③		①		
態度	⑤				②		④	③		①		
知識	①	②				④				③		
思・判				②		①		③	④		⑤	

(3) 手だて



※コートは9m×9m、ネットの高さ2m

(4) ふり返り

- ①準備運動で、ボールの落下地点に入る練習として、バウンズチャッチの基本的な動きを取り入れ、オーバーハンドパスにつなげた。
- ②ゲーム2、ゲーム3を通して3段攻撃の意識が高まった。
- ③空いた場所をめぐる攻防を意識することによって、レシーブの位置取りを、サーバーに合わせて変えることができるようになった。
- ④ブロック体制から、レシーブ体制に戻るなど前後の動きを指導することによって、フェイントカバーやブロックカバーの意識が高まった。
- ⑤アタック技能が向上することにより、最後はアタックで返す回数が増え、多くの生徒がゲームに取り入れるようになってきた。
- ⑥準備運動からお互いに声をかけ合うことを大切にされた結果、チームとしてのまとまりがより深まり、声をかけ合う、ボールをつなぐ、カバー、などを徹底することで、ラリーが続き、3段攻撃が出るようになり、ゲームを楽しむことができた。

IV 研究のまとめ

小学校2校、中学校2校の実践を通して、ネット型におけるスムーズな接続のための小学校高学年と中学校1・2年生での学習過程を、以下のように考えてみた。

1 小学校高学年の学習過程について

小学校では、ゲームの楽しさを十分に味わいながら、技能も向上できるように下記のことをポイントにして学習過程を考えた。

- ・誰でもがゲームの楽しさを味わうことができるように、返球回数の制限を緩和したり、ボールをキャッチしたりするなど、ルールを工夫する。
- ・ボール操作や個人・チームのめあてに応じた練習などの時間を、授業のはじめに設定する。児童の実態やめあてに応じて教師は積極的に指導したり、意欲が高まるように支援したりしていく。

(1) 学習過程 (小学校高学年 全6時間計画)

1	2	3	4	5	6
<p>簡単なボール操作をみんなで練習しよう。</p> <p>①直上パス練習 ②対面パス練習 ③サービス練習</p> <p>ルールを工夫しながらゲームを楽しもう。</p> <p>1. ゲーム① どうしたらうまくつながるかな？</p> <p>2. ルールの話し合い</p> <p>3. ゲーム② キャッチを使ってつなごう！</p> <p>4. ふり返り 素早く動くことも大切だよ！</p>			<p>めあてに応じた練習を選んで、個人やチームで練習しよう。</p> <p>①パス練習 ②サービス練習 ③ポジション練習</p> <p>チームのよさを生かした作戦を立てて、ゲームを楽しもう。</p> <p>1. ゲーム① どんな作戦を立てたのかな？</p> <p>2. 作戦の話し合い</p> <p>3. ゲーム② 背の高いAさんにボールを集めて返そう！サービスは奥をねらって打とう！</p> <p>4. ふり返り</p>		
<p>業のル 1チーム4人。フリーポジション。 味方で何回でもつないでよい。 2人目の人はボールを持ってよい。</p>		<p>場や用具 ハドミントンダブルスコート ネットの高さ180cm ボールはビニール製100g</p>		<p>業のル 味方でつなぐのは5回まで。 サービスは2回まで打ってもよい。 ゲーム中、タイムアウトをとることができる。</p>	

2 中学校1・2年で行う中の1年次の学習過程について

小学校での学習を受け、中学校では引き続きゲームを楽しめるように、基本的な技能の定着をめざすことをポイントにして学習過程を考えた。

- ・準備運動内で行う内容は、時間を追うごとに、動きのあるものへ変化させるようにし、ゲームの中で生かせるような基本的な技能の定着をめざすようにする。
- ・ゲーム1では、コート小さくしチーム内でボールをつなぐ楽しさや、ボールに多く触れる楽しさを味わうようにする。ゲーム2では、触球数の制限内でボールをつなぐ楽しさを十分経験し、3段攻撃につなげるようにする。リーグ戦では、空いた場所をめぐる攻防や、チームの課題を解決するための練習を行い、試合に生かせるようにする。

(1) 学習過程 (中学校1・2年で行う中の1年次 全10時間)

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
学習内容・活動	ねらい1 基本的な技能を身につける。(習得)						ねらい2 身につけた基本的な技能を生かして、空いた場所をめぐる攻防を展開できるようにする。(活用)			
	準備運動：バウンズからのキャッチ→直上パス、2組パス対面→前後左右に移動してのパスなど									
	○学習の進め方 ○準備運動の仕方 ○チーム編成	ゲーム1 (1/2コート) ・1回で返球はしない ・サーブは、投げ入れ			ゲーム2 (8m×8mコート) ・触球数5回 ・セッター固定 ・アンダーハンドサーブ			リーグ戦 (8m×8mコート) ・三段攻撃を意識する ・アタックにつなげる		
技能		⑥	②	①	⑦		④		③	
態度	⑥	⑤			③	④			②	①
知識	①			④				②		③
思・判			②			①	③	④		
	技能			関心・意欲・態度			知識・理解			思考・判断
	①サーブではボールの中心付近でとらえることができる。 ②ボールをかえす方向に体に向けて打つことができる。 ③相手側のコートに空いた場所にボールを返すことができる。 ④味方が操作しやすい位置にボールをつなぐことができる。 ⑤テイクバックをとって肩より高い位置からボールを打ち込むことができる。 ⑥相手の打球に備えた準備姿勢をとることができる。 ⑦プレイを開始するときは、各ポジションごとの定位置に戻ることができる。 ⑧ボールを打ったり受けたりした後、ボールや相手に正対することができる。			①バレーボールに、積極的に参加しようとしている。(共通) ②フェアなプレイを守ろうとしている。(公正) ③分担した役割を果たそうとしている。(責任) ④話し合いに参加しようとしている。(参画) ⑤仲間の学習を援助しようとしている。(協力) ⑥健康・安全に留意している。(健康・安全)			①ネット型やバレーボールの特性や成り立ちについて、言ったり書きたたりしている。 ②バレーボールの技術の名称やその具体的な行い方や活用方法について、言ったり書きたたりしている。 ③バレーボールに関して高められる体力について、言ったり書きたたりしている。 ④簡易な試合のルールを言ったり書きたたりしている。			①ボール操作やボールを持たない動きなど、バレーボールの行い方の自分に合ったポイントを見つけている。 ②自己やチームの課題を見つけている。 ③自己やチームの課題に応じた練習方法を選んでいる。 ④分担した役割に応じた協力の仕方を見つけている。 ⑤学習した安全上の留意点を他の試合場面で当てはめている。

3 まとめ

今回の学習指導要領の改訂では、指導内容の確実な定着を図るために指導内容を明確化するとともに、学校段階の接続を踏まえて、小学校5年生から中学校2年生までの4年間をひとまとまりとしている。今までも、小学校、中学校、それぞれがネット型の研究は行っているが、接続を意識した研究はなかなかみられなかった。今回の本研究では、以下の3点がスムーズな接続にとっては非常に重要であることが分かった。

- (1) それぞれの学習指導要領の内容の十分な理解
- (2) 指導の工夫の必要性
- (3) お互いの学習内容の把握

やはり、基本は学習指導要領である。指導者が学習指導要領を十分に理解することが重要である。また、生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育成するためにも、ネット型の特性に触れながら、小学校ではゲームを十分に楽しむ、中学校でもゲームを楽しめるように、基本的な技能を習得するための指導の工夫が必要である。なお、ゲーム形式は簡易ゲームも含めて、早い段階から行っていくことが望ましい。さらに小・中学校ともに、お互いの学習内容を十分に把握した上で学習過程をたてるのが大切である。

ただし、IVの1、2で提案した学習過程については、実践授業を通して考えたものである。来年度以降、それぞれの学校で、更に実践を重ね、修正していくことが大切である。

最後に、研究を進めるに当たり、ご指導、ご助言をいただきました先生方、研究をご支援いただきました所属校の校長先生をはじめとする教職員の皆様に、心からお礼を申し上げます。

【指導助言者】

川崎市立小学校体育研究会長 (川崎市立木月小学校長)

君塚 一夫

川崎市立中学校教育研究会保健体育科部会長 (川崎市立南河原中学校長)

渡邊 壽久